みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Museums of Natural History Visited in the United States

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮本, 繁雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004641

アメリカ合衆国の自然史博物館

宮　本　繁　雄*

はじめに

1976年1月22日から30日まで，サンフランシスコをふりだしにシカゴ，ワシントン，ニューヨークの各都市をまわり，自然史博物館を4か所訪問した。それぞれの博物館の組織や管理運営の実情，民族学資料の展示の仕方などをたしかめるのが目的であった。

アメリカには，民族学あるいは人類学専門の博物館はひとつもない。そのかわり「自然史博物館（Museum of Natural History)」の名称を持つ博物館が各地にあって，そのうち比較的大きな博物館は民族学の展示をおこなっているのがふつうのようである。

それでは，「自然史博物館」とは何か。ワシントンにある国立自然史博物館の公式ガイドブックは，同館の性格をこう説明している。「植物，動物，岩石，鉱物，化石および人間それ自体に関する資料収集と研究活動を通じて，人間とその自然環境に関する研究をおこなうためのセンターである」と。この定義は，アメリカの大きな自然史博物館にほぼ共通に当てはまるものとみてよいであろう。

同じ国立自然史博物館の作成した内部資料によれば，「アメリカの主要な自然史博物館」は，次の6館だという（順序はアイウエオ順)。

1. アメリカ自然史博物館（ニューヨーク）
2. カリフォルニア科学アカデミー博物館　（サンフランシスコ）
3. 国立自然史博物館（ワシントン）
4. デンバー自然史博物館（デンバー）
5. フィールド自然史博物館（シカゴ）
6. ロサンゼルス　カウンティ自然史博物館　（ロサンゼルス）

私が訪問したのは，以上のうちニューヨーク，サンフランシスコ，ワシントン，シカゴの4館である。サンフランシスコとシカゴの2館では，一般の入館者なみに館内を見学してまわっただけであるが，ニューヨークとワシントンの2館の場合は，渡米前に連絡がとれていたので，館長その他の職員と面会し，館の組織や展示のあらましについて説明を聞くことができた。

なにぶん1都市2泊ずつの駈足旅行のため，各館で過ごすことのできた時間はせいぜいまる一日程度であった。したがって，充分納得のゆくまで不明の点をたしかめたり，見学したりするゆとりはなかった。あらかじめ用意して持参した簡単な調査票にも，かなり空欄が残った。

以下は，そのような短期間の調査旅行からえた見聞と印象の記録である。

* 国立民族学博物館管理部

1. 共通の特色

ひとつひとつの博物館について述べるまえに，比較対照の便宜上，4館の概要を一覧表にまとめてみると，表1のようになる。この表をもとに，これらの博物館に共通しためぼしい特色をいくつか拾いあげてみよう。

いずれも歴史が古い　まず，4館とも歴史の古い博物館である。いちばん古いカリフォルニア科学アカデミーは120年以上もまえに創立されている。いちばん新しい国立自然史博物館にしても70年近くまえの設立である。

なお，国立自然史博物館を除く3つの博物館はいずれも私立である。しかし，地方自治体または州政府から相当額の財政援助を受けている。

1年中ほとんど無休　開館日と開館時間を調べてまず目立つのは，4館ともほとんど年中無休だということである。休館日は年間に1日か2日しかない。それと，特筆してよいのは夜間開館日が設けられていることであろう。カリフォルニア科学アカデミー博物館と国立自然史博物館は，毎年夏になると，夜間まで開館時間を延長している（国立自然史博物館の場合は午後9時まで）。フィールド博物館は，夏のあいだは毎週水曜，土曜，日曜の3日間だけ午後9時まで開館するほか，夏以外の季節でも毎週金曜日だけやはり午後9時まで開館している。このような夏季あるいは週1回の夜間開館はアメリカの博物館・美術館では，決して珍しいことではない。

入館料は非常に安い　おとなの入館料をみると，カリフォルニア科学アカデミー博物館の場合は50セント（約150円），フィールド博物館の場合は1ドル（約300円）である。50セントや1ドルという入館料は，アメリカ人の生活水準を考えると，非常に安いといえる。なお，カリフォルニア科学アカデミー博物館では毎月1回，フィールド博物館では毎週1回，それぞれ無料公開日を設けている。

アメリカ自然史博物館は，特定の入館料は定めずに，「随意（discretionary）」の額を入館者から徴収するという方式を採用している。しかし，博物館側は，おとな1ドル，こども50セントの額を示唆しているので，大半の人はそれに従っているようである。このような「随意」方式は，アメリカではかなり普及しているとみえる。同じニューヨークにあるメトロポリタン美術館でも「入館料」は定めていないが，1ドル75セント以上の「寄付」を来館者からいただく建前になっていた。私が入口の窓口で1ドル紙幣を2枚さし出したら，窓口嬢が「1ドル75セントですか」と念を押して25セントのお釣をよこしてくれたのを憶えている。

ついでながら，サンフランシスコ，シカゴ，ニューヨークの3都市では美術館にも立ち寄ったが，どこの都市でも，入館料（または「寄付金」）は，ほとんど例外なく美術館のほうが自然史博物館よりも高かった。大体少なくとも5割方高い金額を徴収している。芸術品という宝物を見せるのだから，入館料も少し気取って高くしてあるのかも知れない。

入館者の数はおどろくほど多い　年間の入館者数が多いことには驚かされた。国立自然史博物館は年間約350万人というから，1日平均実に1万人の計算になる。比較的少ないアメリカ自然史博物館の場

表1　訪問先4館の概要

	カリフォルニア科学アカデミー（1月22日）	フィールド自然史博物館（1月25日）	国立自然史博物館（1月26〜27日）	アメリカ自然史博物館（1月29日）
1．所在地	サンフランシスコ	シカゴ	ワシントン	ニューヨーク
2．創立年次	1853年	1893年	1910年	1869年
3．設置者別	私立	私立	国立	私立
4．開館日	毎日 （クリスマスを除く）	毎日 （クリスマスと1月1日を除く）	毎日 （クリスマスを除く）	毎日 （クリスマスと感謝祭を除く）
5．開館時間	10時〜17時 （夏は「もっとおそくまで」）	9時〜16,17,18時 （季節により異なる） 金曜日 9時〜21時	10時〜17時30分 （夏は21時まで）	10時〜16時45分 日曜・祭日 11時〜17時
6．入館料	おとな（18〜64歳）50セント 生徒（12〜17歳）25セント 他は無料 毎月1日は無料入館日	おとな（18〜64歳）1ドル こども（6〜17歳）35セント 老人（65歳以上）35セント 毎週金曜は無料入館日	無料	入館料の額は「随意」。ただし，館側は， おとな　1ドル こども　50セント の額を示唆。
7．年間入場者数	約300万人 （水族館，プラネタリウムを含む）	…	約350万人	約180万人
8．収蔵標本点数				
(1) 総数	…	1,300万点以上	5,500万点以上	2,330万点以上
(2) 人類学標本*	…	…	約138万点	100万以上
9．展示中の標本点数				…
(1) 総数	…	…	55万点以上	
(2) 人類学標本*	…	…	約4,000点	…
10．展示場面積				
(1) 総面積	約1万7,000 m^2	約4万1,000 m^2	約1万5,000 m^2	約2万2,500 m^2
(2) 人類学関係	…	…	約　4,500 m^2	…
11．展示で扱っている範囲				
(1) 動物学	○	○	○	○
(2) 植物学	○	○	○	×
(3) 地質学	○	○	×	×
(4) 鉱物学	×	×	○	○
(5) 人類学	×	○	○	○

*考古学標本を含む

合でも1日平均ざっと5,000人である。入館者の多い理由としては，入館料が安いこと（国立自然史博物館は無料）もあげられようが，どの博物館も周辺地域の児童生徒の教育に積極的に協力する方針をとり，多彩な教育活動を組んでいることがもっとも大きな原因といえるようである。アメリカ自然史博物館のニコルソン館長は，「入館者のなかでいちばん大きな部分を占めるのは9歳から13歳までの児童です」といっていたが，他の博物館でも，事情は大同小異のように思われる。

展示品はコレクションのごく一部　国立自然史博物館の所有する各分野の標本資料の点数は実に5,500万点にのぼる。人類学（考古学を含む）標本だけでも140万点近くに達する。アメリカ自然史博物館の場合は規模がやや小さくなるが，それでも，標本総点数2,330万，うち人類学標本100万強という，けたはずれの大きさである。

ところが，実際に展示場に陳列されている標本の数となると，全コレクションのまさに九牛の一毛にしかすぎない。国立自然史博物館の場合は約1％と発表されている。アメリカ自然史博物館の場合は正確な数をたしかめられなかったが，1％から多くて2～3％と私は推定している。

4館はいずれも相当数の研究者をかかえた，いわば研究博物館である。カリフォルニア科学アカデミー博物館も国立自然史博物館も，またアメリカ自然史博物館も，研究者の数はポスト・ドクトラル・フェローを含めて，100人以上にのぼっている（フィールド博物館については不詳）。つまり，博物館自体が自然科学や人類学について，たえず研究をおこなっているわけである。尨大なコレクションは，展示のためだけに集めたわけではないのだから，展示品が少ないからといって別に怪しむには当たるまい。とはいっても，正直なところ，コレクション全体の量と展示品の量とのギャップの大きさには驚かされる。

以下，館ごとの記録に移る。民族学展示のあるシカゴ，ワシントン，ニューヨークの3館だけを取り上げることとし，民族学展示を欠くサンフランシスコの科学アカデミー博物館については省略する。

2. フィールド自然史博物館 (Field Museum of Natural History)

1月25日朝，シカゴ市内のラサール・ホテルから地図をたよりに歩いて博物館に向う。冬のシカゴは，寒さが厳しい。歩いていると，冷い外気のために顔が冷えてくるのがわかる。防寒帽をかぶった人が多いのも，なるほどとうなずかれた。遠くに博物館の姿を発見した頃，雪が降り出してきた。オーバーコートをすっぽり頭からかぶり，急いで博物館に駈けこむ。

1) 館の由来と施設

「世界の偉大な博物館のひとつ」　この博物館は，シカゴ市の東部，ミシガン湖に面するグラント公園の南端にある。1893年，シカゴの富豪マーシャル・フィールドの寄付金により設置されたもので，この富豪の死後も，フィールド家は代々，博物館の運営に大きな貢献を果たしてきた。しかし，館の現在の名称が確定したのは比較的新しく1966年である。1943年

から20年あまりのあいだは，Chicago Natural History Museum の名で呼ばれていた。

入口で受け取った無料の案内パンフレットを開けてみると，まず，「世界の偉大な博物館のひとつにようこそおいで下さいました。」とあり，続けて，こう書いてあった。

「当館は，人類学，植物学，地質学，動物学を専門とする自然史博物館です。大きさにおいて，ロンドンの大英博物館，ワシントンの国立自然史博物館およびニューヨークのアメリカ自然史博物館と肩を並べます。」

さらに，数行あとには，「当館の焦点は，現在とともに過去に向けられています。常設展示と特別展示のねらいは，ほかのいろいろな文化の美と（世界の文化に対してそれぞれの文化が果たしている）寄与とを，そしてまた，自然界の驚異を，来館の方々に発見していただくことにあります。」とあり，これは，なかなかしゃれた文章だと感心した。

荘厳なギリシャ建築　この博物館の建物は荘厳なギリシャ風建築である。地下1階，地上3階の4階建てで，地階の一部と1階，2階の全部が展示場に当てられ，地階の残り部分と3階には，収蔵庫，事務室，研究室などがある。

広大なエントランス・ホール　館の入口は北側と南側とにひとつずつあり，北の入口から南の入口まで巨大なエントランス・ホールが広々と横たわっている（図1参照）。私は，北側の入口からドアを押して入ったとたん，目の前に広がる大ホールに思わず圧倒された。奥行約90メートル，間口約20メートル，高さ約23メートル，3階までの吹き抜けである。このホールには，北側入口寄りに小さな噴水があり，中央左寄りに剝製のアフリカ象が二頭，台のうえに立っている。さらに，その背後，南側入口寄りには，巨大なトーテムポールが2本立ち並ぶ。ブリティッシュ・コロンビアのクイーン・シャーロット島の収集品で，高さ12メートル。1893年のシカゴ万国博に初めて展示されたものだという（写真2）。

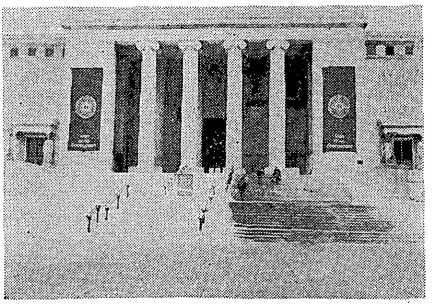


写真1　フィールド自然史博物館の正面玄関（北口）

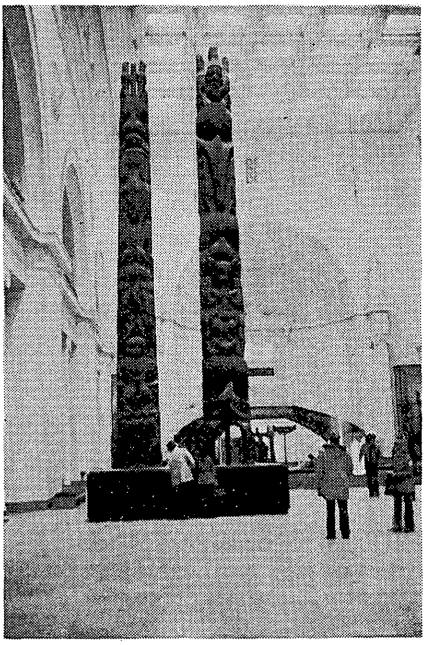


写真2　フィールド自然史博物館のエントランス・ホール

展示場は，この大ホールを囲む形で，1，2階に配置されている。入館者の多くはまずこの広々としたホールに足をとめ，象やトーテムポールを眺め，高い天井を見上げるなどして，一息入れてからゆっくりと展示場に足を運んでいた。

この博物館で，私が最も強い印象を受けたのは，展示場や展示品よりもむしろこのエントランス・ホールの巨大な空間であった。この空間は，はじめてこの博物館を訪れるほとんどの人たちに「これは，よいところに来た」と感じさせるだけの効果があるのではないかと思った。

2) 展　示

アメリカ展示にウエイト

この博物館は人類学（考古学を含む）展示にかなりの比重を割いており，展示場面積全体のなかで人類学関係の展示面積が占める割合は，ワシントンの国立自然史博物館やニューヨークのアメリカ自然史博物館に比べて，格段に大きかった。常設展示ホールは全部で36を数えるが，そのうち人類学展示のホールは半数の18を占めている（ただし，この18のうち地階にある6つのホールは模様がえのため閉鎖中であった。1階と2階の平面図を図1に示した）。

人類学関係の展示ホールの数を，それぞれの取り扱う民族（あるいは地域）によって分けてみると，次のようになる。

アメリカのインディアンとエスキモー	7
中国	1.5
チベット	0.5
東南アジア	1*
オセアニア	2*
アフリカ	2*
考古	3
原始美術	1
計	18

* 閉鎖中。いずれも地階。

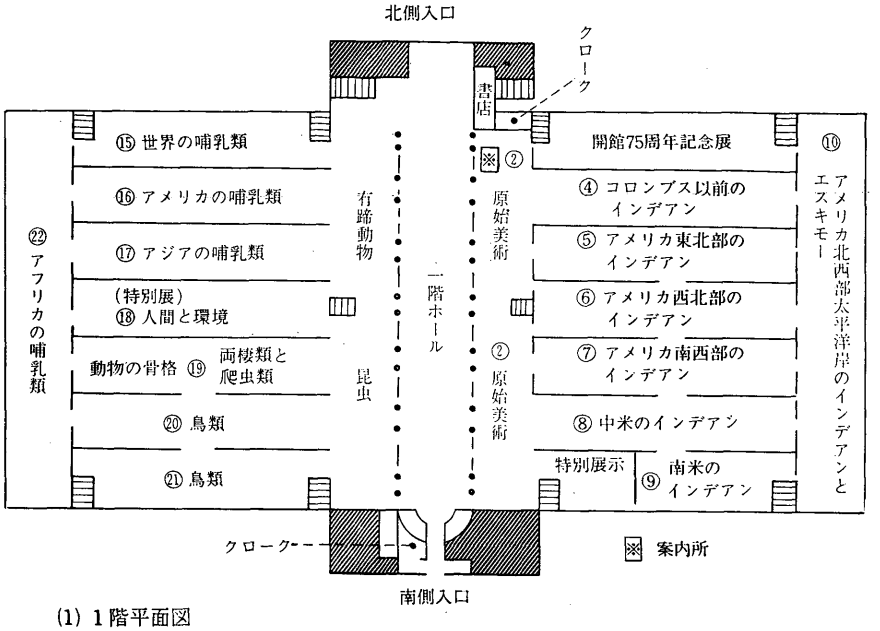
これをみても分かるように，アメリカ両大陸の占める比重が非常に大きい。しかし，この点はなにもこの博物館に限ったことではなく，アメリカの自然史博物館に共通に見られる現象といってよいようだ。むしろ，この博物館の場合は，アメリカ以外の展示の占める割合が，他のアメリカの自然史博物館よりも大きいようである。少なくとも，ワシントンとニューヨークの2館と比べると，明らかに大きい。

ただ，残念なことに，アフリカ，オセアニア，東南アジアの各展示ホールは，私が訪れたときには閉鎖中で，アメリカ展示のほかは，わずかに中国とチベットの展示，それに原始美術の展示に接することができただけであった。

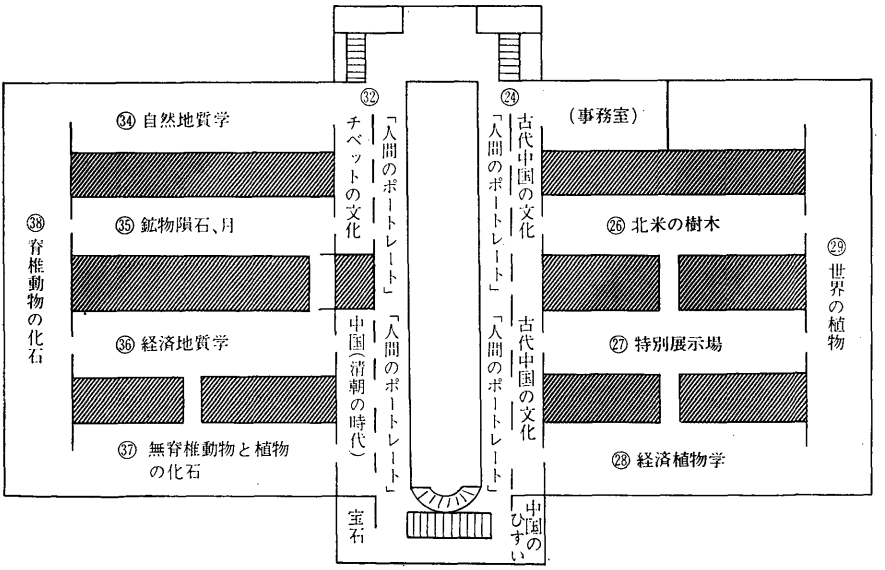
展示の手法は保守的

展示の内容については詳細を省くとして，展示の手法をみると，きわめて保守的で，新鮮味に乏しい。原始美術品はもちろんのこと，各民族の生活用具，生産用具，武器，そういった標本資料はすべてショーケースに並べて展示するという方式が一貫して採用されている。来館者がショーケースのなかに見るものは，デパートのショーウィンドーのなかの商品のように手際よく気持よく並べられた標本資料とこれを説明する解説文あるいは地図やグラフ，そしてたまにマネキン人形，といった程度である。

閉鎖中のホールが多かったので，この館の民族展示の全体についてそういえるとは断定しかねるが，映像音響機器はほとんど採用されていなかった。



(1) 1階平面図



(2) 2階平面図

○ の中の数字はホール番号

図1　フィールド自然史博物館の展示場平面図

ところが，たまたま開催されていた「人間とその環境（Man and His Environment)」という特別展示に1歩足を踏み入れると，そこはまた打って変った映像と音響の世界であった。博覧会形式の動的な展示で，常設展示場の古めかしさとはあまりにも対照的でびっくりした。

懇切ていねいな解説　もうひとつ目立った特長は，展示テーマや展示品の解説が懇切ていねいで，分かりやすいことであった。ほとんどどのショーケースを見ても，展示のテーマや展示品について懇切ていねいな解説が書き込まれている。児童，生徒，学生の学習を念頭に置いて，博物館を教育の場としておおいに役立ててもらおうとする館側の態度をうかがい知るに充分であった。

一般にアメリカの博物館・美術館は，児童生徒，成人に対する教育活動が活発であるように見受けるが，フィールド博物館も御多聞にもれない。児童生徒などの団体を対象に解説つき館内一周，講演，映画上映などのサービスをおこなっているほか，標本資料を学校に貸出すなどのサービスもおこなっており，この面でもたいへん意欲的なようであった。

3. 国立自然史博物館 (National Museum of Natural History)

1月26日午後，シカゴからワシントンに飛ぶ。宿舎は，博物館のすぐ近くのエビット・ホテルという小さな宿屋を予約してあった。渡米まえに博物館の人類学研究部長フィッツヒュー（Fitzhugh）さんから，「午後3時にお待ちする」という連絡があったので，ホテルに荷物を置くと，その足ですぐ博物館に向った。

フィッツヒューさんの手配で，26日の夕方から27日の夕方にかけて，人類学研究部の民族学研究者グループをはじめ，展示課長，展示委員長，人類学資料整理室長，総務課職員といった人たちに面会した。話を聞くことに時間をとられてしまい，展示場は人類学関係のところを大急ぎで一巡するだけに終ってしまった。

1) 館の由来と施設

スミソニアン傘下の国立博物館　首府ワシントンの南部，ワシントン記念碑と国会議事堂とのあいだに The Mall と称する広い緑地帯がある。その一角に，歴史・技術博物館（National Museum of History and Technology）とナショナル・ギャラリー・オヴ・アート（National Gallery of Art）とのあいだに挾まれた形で立っているのが国立自然史博物館である。この3つの博物館・美術館はいずれも，国立機関スミソニアン・インスチチューション（Smithsonian Institution）の施設である。

26日の夕刻，フィッツヒューさんの紹介でアジア地域人類学の主任研究員クネーズ（Knez）博士に会う。クネーズさんは，いきなり「この博物館を理解していただくために，博物館がどうして生まれたか，その話をさせて下さい」と前置きして，スミソニアン・インスチチューションの創設者ジェームス・スミソン（James Smithson）の話を切り出したものである。

「スミソンは，オクスフォード大学で化学を専攻したイギリス人でした。父親は公爵でしたが，かれは庶子だったので爵位をつぐことはできなかったのです。かれが1829年にイタリアのジェノアで死

んだとき，当時の金額で50万ドル以上にのぼる遺産を残しました。遺書には，『人人のあいだに知識の増大普及をはかる』ため，この遺産の全部を使って，『スミソニアン・インスチチューション』をワシントンに創設してほしい，とあったのです。かれは生前アメリカの土を踏んだこともありませんでした。イギリスに希望を失ったかれは，新天地アメリカに夢を託したのでしょう。この遺産をアメリカが受け取ったのは1838年ですが，連邦議会は，これを受け入れるべきかどうかについて実に20年近くも議論を重ねたのです。そして，やっとスミソンの遺志を実行することにしたわけです」。

こうして，1846年にこのインスチチューションが創設され，その1施設として自然史博物館が1910年に設置されることになる。

今日，スミソニアン・インスチチューションには，博物館や研究所など20の施設がある。そのうち14は博物館または美術館，5つは研究所，1つは劇場（ケネディ・センター）である。

スミソニアン・インスチチューションの管理機関である理事会は，副大統領，最高裁長官，上院議員3人，下院議員3人，一般国民のなかから選ばれた者9人合計17人で構成される。

自然史博物館の運営は館長が責任を持ち，固有の理事会はない。館長以下の職員はすべて連邦公務員である。運営費の約90%は，連邦予算でまかなわれる。残りは，寄付金，基本財産収入，事業収入などだが，いずれもわずかである。スミソニアン傘下の他の博物館・美術館と同じく，この博物館も入館料は徴収していない。

狭い展示スペース

この博物館の建物は，シカゴのフィールド博物館に似通った古典的な建造物で，地下1階，地上4階の5階建てである。地階は講堂，図書館，特別展示場など，1階と2階は展示場，そして3階と4階は，収蔵庫，研究室，事務室などにそれぞれ割り当てられている。

この博物館の大きな悩みは，展示場のスペースの狭いことだ。収集した標本資料の点数は5,500万点を越えるが，展示場面積は現在1万5,000平方メートルにとどまっているので，展示場には全体の1%ほどの資料しか陳列していない。

人類学に限っていうと，収蔵標本数は考古学資料を含めて約138万点に及ぶが，そのうち展示場に陳列してあるのは約4,000点（0.3%）にしかすぎない。人類学関係の展示面積はざっと4,500平方メートルだと総務課のシーボルトさんが教えてくれた。4,500平方メートルといえば，わが国立民族学博物館が開館時に予定している標本展示場4ブロックの全体面積4,820平方メートルにも及ばない。

人類学研究部長のフィッツヒューさんは，「日本に民族学の国立博物館ができたのは羨ましい。私たちの博物館は展示場が狭すぎるので，拡張を要求しているが，なかなか実現しない。人類学専門の博物館を独立して設ける構想もあるが，予算を取るのが難しい」と，いかにも残念そうな口ぶりであった。

博物館内部の資料によると，この博物館は「アメリカの主要な自然史博物館」6館のなかで最大のコレクションを誇るにもかかわらず，展示場のスペースは，6館のなかでいちばん狭いという。

2) 展　示

民族学展示は少ない

その狭い展示場の割りふりは，図2のとおりで，現在使用中の展示ホール23のうち人類学の展示に割り当てられているのは8つである（上に述べたように，人類学関係の展示面積は約4,500平方メートル）。フィールド博物館の場合ほど人類学展示の占める比重は高くないことが分かる。しかもこの8つのホールのうち3つ（ホール番号21,22,23）は，南北アメリカの考古学資料の展示，ひとつ（ホール25）は，自然人類学の展示で占められている。民族学関係の展示には次の4つのホールが割り当てられているにすぎない。

ホール 7　アフリカと中東の諸文化
〃　8　オセアニアとアジアの諸文化
〃　9　アメリカ両大陸の原住民
〃　11　同　上

実物中心主義を堅持

スミソニアン・インスチチューションの作成したタイプ刷りの部厚な資料（"Increase and Diffusion——A Brief Introduction to the Smithsonian Institution"）は，この自然史博物館の展示の方式についてこう書いている。「標本資料をマホガニーとガラスのケースに入れて陳列するという旧式の展示スタイルは，近年，さまざまの新しい技術（視覚，聴覚，嗅覚機器）を活用した現代式展示に大幅に道を譲ってきた」。

しかし，少なくとも私が一巡した民族学関係の展示場に関するかぎり，視聴覚機器あるいは嗅覚機器を活用した「現代的展示」に「大幅に道を譲ってきた」形跡はあまり見当らなかった。なるほど，シカゴのフィールド博物館に比べれば，展示場の構成にいくらか新機軸が認められたし，標本資料のほか模型，レプリカ，写真，パノラマ，カラーコルトンなどを利用することにより，展示に魅力と変化を持たせる工夫が施されてはいた。しかし，フィルムやテープなどの映像や音響はほとんど活用されていない。

現代機器をあまり導入していないのは館自体の方針なのか，それとも，導入したい気持はあっても，予算が足りなくてできないのか，と疑問に思っていたが，前述のクネーズさんからいただいた内部資料「展示模様がえの長期計画」を読んでいるうちに，この疑問は氷解した。

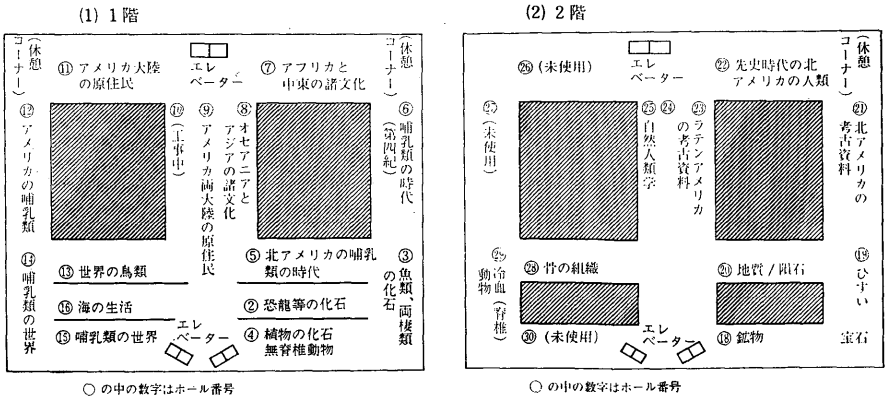


図2　国立自然史博物館の展示場平面図

この資料のはじめのほうに，長期計画立案の基本原則を4項目示したところがある。なかなか示唆に富むと思われるので，少々長くなるが，そこの部分を要約してみよう。

第1原則　当館のメディアの中心は実物（つまり標本資料）である。来館者は，実物をみることによって新しい知識を獲得し，すでに持っている知識にこれを関連づけることができる。実物には，視聴覚メディアにはないなまなましさがある。

メディアの氾濫する現代においてスミソニアンが人々のあいだに人気を増しつつあるのは，ひとつには，実物をみたいという人々の願望によるものである。われわれは，視聴覚機器や文章などを補助手段として利用はするけれども，視聴覚技術や文章による展示を展示の主力とすることは拒否する。

第2原則　実物に対する理解を促進する第一の手段は，実物を展示ホールに並べる，そのアレンジの仕方にある。

第3原則　展示を成功させる要素は，慎重につくり上げた学問的コンテクストと，すぐれたデザイン技術，展示技術とである。この2つの要素のうちひとつを犠牲にして他のひとつを優先させてはいけない。

第4原則　実物のなかには人間の美的感覚に訴えるものもあるが，われわれの第一の目標は，自然界に対する人々の理解を促進することにある（美的感覚に訴えればよいというものではない）。

つまり，第1原則から読み取れるように，この博物館の責任者は，展示の中心はあくまで実物であり，実物の迫力をひき立たせるような展示方式を第一と考えているのであって，視聴覚技術の大幅導入には警戒心を持っていると見てよかろう。

意欲的な模様がえプラン　この博物館では，前記の「長期計画」に基づいた模様がえが始まっており，このため展示ホールのなかには閉鎖中のものがあった。模様がえの主なねらいは，「長期計画」によれば次の2点である。

1. 各展示ホール相互間に有機的な関連を持たせる。
2. トピック（あるいはテーマ）中心に展示場をアレンジする。

人類学展示の場合に具体的にどうなるかというと，まず第一に，現在1階と2階とに分かれている人類学関係の展示場を，「人間」と「文明」を取り扱う展示場として2階に集める。第二に，現在の地域別，民族別展示をやめて民族相互間の関係や，人間と文化的，自然的環境との関係を中心とした展示に切りかえる，という。この結果，展示場の割りふりは，図3のように変化する。

模様がえのねらいは，この図を見ただけでも明らかであろう。なお，ホール26の「西洋文明の源」の展示では，人間が植物と動物を自分のものにしてきた過程，冶金術の発達，西洋文明の普及・発展の原動力となった人間の文化的，社会

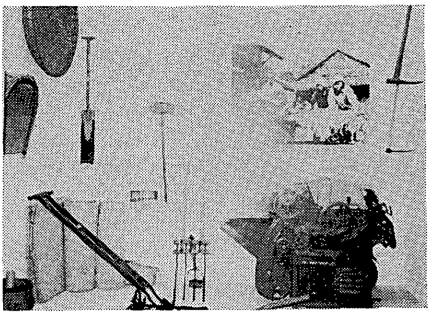


写真3　国立自然史博物館の展示の一例「日本の農業の進化」

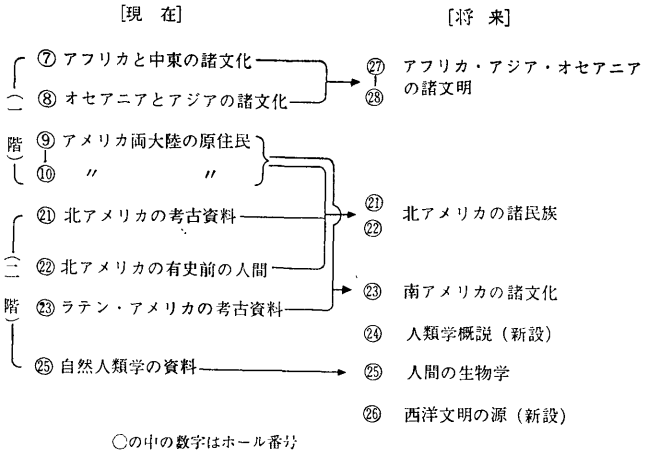


図 3　国立自然史博物館の人類学展示場—現在と将来—

的適応の過程といったテーマを取り扱う。このため，人類学，民族学の展示が中心にはなるものの，自然科学の展示も一体的に織り込まれるという。いわば，新しいインターディシプリナリーな展示を目ざしているわけで，ユニークな試みといえよう。

3）組　織

館員は600人近く

この博物館の組織は図4のとおりで，館長と副館長のもとに，管理業務，展示業務などを受け持つ事務系の部局のほか7つの研究部門が置かれている。職員の数は，常勤540人，非常勤30人と聞いた。

クネーズさんが調べてくださったところでは，常勤540人のうち研究者(Curatorなどの肩書を持つ）の数は111人で，このうち人類学研究部の研究者は20人である。なお，これら常勤の研究者のほかに，これをはるかに上回る数の研究協力者がいる。その大半は Research Associate の肩書きを持つ人たちで，スミソニアン・インスチチューションその他から研究奨励金（フェローシップ）を受け

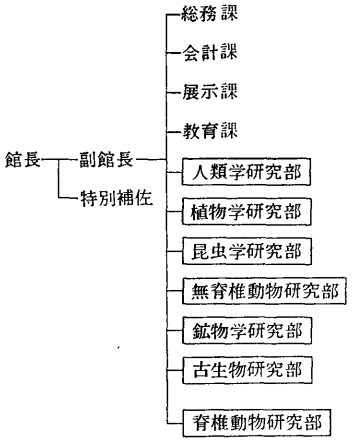


図 4　国立自然史博物館の組織

つつ，館の研究業務の手伝いをしている研究者である。

展示関係の職員35人

展示課長ハート(Hart)さんの話では，展示の設計も施工もほとんど外注せず，館のなかでこなすことにしている。そのための職員を35人も雇っているという。この35人に含まれるのは，グラフィック・デザイナー，イラストレーター，電気技術者，家具製作・模型製作などの技術者，画家，

大工などである。「われわれは，ショーケースの製作からパノラマの設計・製作にいたるまですべて館内でこなすだけのスタッフをかかえている。よほど大がかりな作業を要するものでないかぎり，外に注文することはしない」とハートさんは誇らしげに語った。「館のなかでこなすほうが外注の場合よりも質のよいものを作れるから」という話であったが，アメリカでは一般に外注のほうが高くつくという経済的な理由もありそうだ。アメリカの大きな博物館は大体どこでも，展示の設計・施工を自前でこなせる体制をととのえているようである。

国立自然史博物館の場合，この自給自足の体制はなにも展示にかぎらない。標本資料の補修なども，館内の標本修理室に専門の技術者が何人かいて一手に引き受けている。また，いくつかの売店もすべて館の直営であり，売場で働く人たちもみな常勤または非常勤の博物館職員であった。

4. アメリカ自然史博物館 (American Museum of Natural History)

ワシントンを発ってニューヨークに着いたのは1月28日。翌29日の午前10時少し前，日本総領事館に勤める友人の車でセントラル公園西通りに面した博物館の正門に着く（写真4）。門の前には，家族連れなど数人が立って開館を待っていた。10時きっかり，鉄の扉が開かれると同時に，人々の列のあいだにまじって中に入り，受付で館長に面会を求めた。

まもなく渉外係の婦人がやってきて，館長室に案内してくれる（この婦人は1日中，私の案内役をつとめてくれた）。館長室でニコルソン（Nicholson）館長とウイーバー（Weaver）副館長から，博物館の組織や展示の方針などについて話をきいたあと，人類学研究部長のフリード（Freed）博士，展示部長のガードナー（Gardner）さん，教育部のペシノ（Pessino）女史の部屋を歴訪した。

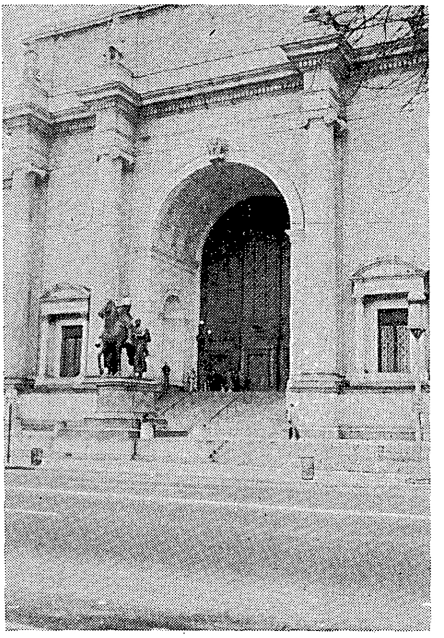


写真4　アメリカ自然史博物館の東側正門

ワシントンの国立自然史博物館のときと同じように，ここでも話を聞いているうちにたちまち閉館時間まじかとなり，あわてて展示場をひと回りする羽目となった。

1）館の由来と施設

100年の歴史を誇る博物館　この博物館は，1869年つまり明治2年にアルバート・スミス・ビックモア（Albert Smith Bickmore）という人が「自然史の研究と教育の推進」のために創設した博物館である。

館の案内書によると，最初はセントラル公園のなかの，ささやかな建物で店開きをしている。その礎石は，1874年にグラント大統領によってすえられた。館の正式開館は1877年，開館の式典はヘイズ大統領の出席のもとにおこなわれたとある。

この博物館は私立であるが，経常収入の2割強はニューヨーク市の補助金でまかなわれている。ほかに，比較的少額ではあるが，州からも補助金の交付を受けている。

20の建造物の集合体

この博物館の建物は，100年のあいだに少しずつ建て増しされてきたもので，その数はいまや20にも及ぶ。建物の床面積は10万平方メートルに近く，窓の数は2,000，ガラスの総面積は9,000平方メートルに達するという。

それぞれの建物の様式は，建てられた時代を反映して，ゴシック風あり，ロマネスク風あり，現代風ありという工合でさまざまである。このため，博物館の外観は，どこから眺めるかによって著しく変化する。たとえば，正門のある東側の建物は灰色の大理石建築であるが，南側に回ると，そこには，中世ヨーロッパの古城を思わせる幻想的な建物がそそり立っている。壁の色は桃色である。

20の建物はお互いに連絡通路で結ばれているので，外を歩かずに建物から建物へと渡り歩くことができるようになっている（図5参照）。初めてここを訪れる人にとっては，館内のひとり歩きは，展示場は別として，決して容易ではなさそうである。

2）展　示

見当らなかったアジアの展示

展示場は1階から4階までにまたがっているが，私がざっと数えたところでは，大小さまざまの展示ホールの数は全部で24になる。そのうち，人類学関係の展示ホールは6つである（表2）。

シカゴやワシントンの自然史博物館と

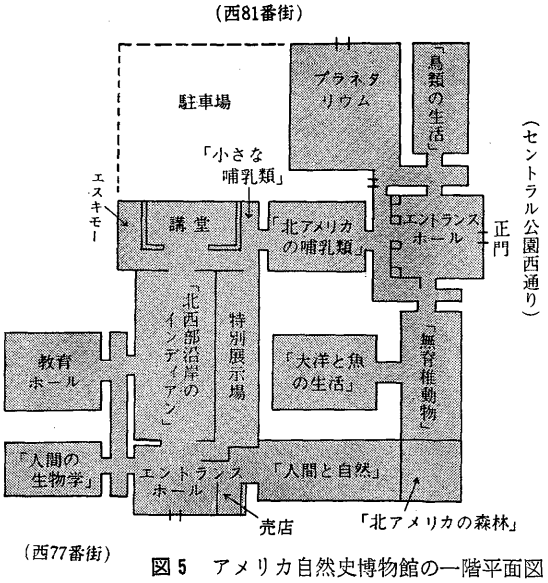


図5　アメリカ自然史博物館の一階平面図

表2　アメリカ自然史博物館の人類学関係展示ホール

1階	1. 北米（北西部沿岸）のインディアン 2. エスキモー
2階	3. アフリカの人間 4. メキシコと中米
3階	5. 北米（東部と中部）のインディアン
4階	6. 太平洋の諸民族*

*ポリネシア，ミクロネシア，メラネシア，オーストラリア，インドネシア，フィリピン

比べて，まず目立つことは，考古学資料のために独立した展示ホールが割当てられていないこと，また，インドネシアとフィリピンを除き，アジア地域の展示がまったく見当らないことであった。人類学展示全体のなかでアメリカ両大陸の展示が占める比重は，シカゴやワシントンの博物館よりもさらに大きいように思われた。

もっとも，博物館の一角では，日本を含めたアジア地域の新しい展示場の工事が始まっていた。たしか1978年秋完成の予定で，ちょうどショーケースの取り付けをほぼ完了し，展示のデザインの設計を進めているときであった。それほど大きいとも思えない展示場の完成に2年もの歳月をかけるという悠長さが，綿密周到なプランニングのせいなのか，それとも予算不足のせいなのか，残念ながら聞きもらした。

現代機器を活用

一方，展示の手法になると，シカゴやワシントンよりもかなり新しい趣向をこらしているように思われた。むき出しの展示品も少数ながら見受けられたし，アフリカの展示場では，ジャングルのにおいをただよわせる嗅覚機器を導入するなど，シカゴやワシントンでは見られなかった試みが目についた。

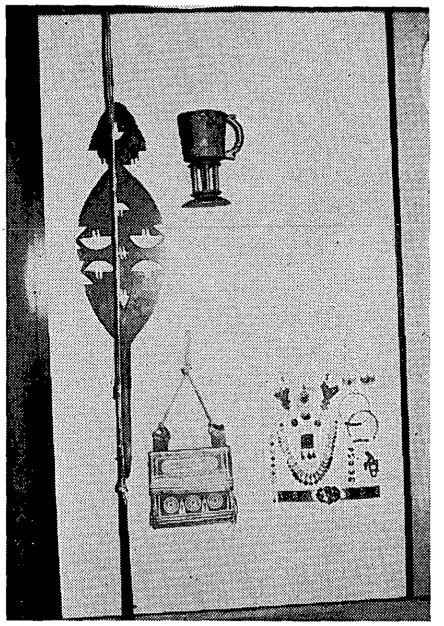


写真5　アフリカ展示の一部（アメリカ自然史博物館）

なお，展示部長のガードナーさんによると，マルチスクリーンをはじめビデオフィルム，録音テープなどを「おおいに」活用しているとのことであったが，私が大急ぎで一巡した人類学関係の展示場に関するかぎり，それらしいものは，2，3か所を除いて，ほとんど見当らなかった。

面白いことに，ニコルソン館長は，新しい映像・音響機器をあまり信頼していない。そういうものは「故障が多くて困る。この広い博物館のなかで，数ある機械がひとつも故障していない日はないくらいだ。新しい機器を買い入れる場合には，維持・管理がうまくゆくかどうかを

よく考えてからにしたほうがよい」と，思わぬ御忠告をちょうだいした。そのことをガードナーさんに話すと，同氏は苦笑しながら，「館長は，機械がよく故障するといって，いつも腹を立てるけれど新しい機械の導入は今日の時代の要求だ。学校や家庭に新しい映像メディア，音響メディアが普及しつつあるときに，博物館がこれに背を向けているわけにはいかない。展示の方法は，時代の動きに合わせて当然変えてゆくべきだ」と確信に満ちた口調で語った。

3）教育活動

多彩な教育活動

この博物館の特色は，展示そのものよりもむしろ展示品その他を利用した教育活動にあるような気がする。

館の作成した1枚刷りの広報資料によれば，「毎年5万人以上のニューヨーク市の児童生徒が当館の "The World We Live In" や "Exploring Man and Nature" という教育プログラムに参加している。ほかに何万という児童生徒が当館を訪れて，当館の教育スタッフの指導に接している」。

教育活動が活発なのは，ひとつには，館の経常費のかなりの部分がニューヨークの市や州の補助金でまかなわれているという事情にも関係があると思われる。地方自治体の補助を受ける以上，博物館がその自治体へのサービスの還元を重視するのは当然であろう。

教育部のペシノさんが教育活動の概略を説明したあとで，「詳しくは，これを読んで下さい」といって渡してくれた幾つかのリーフレットをたよりに，主な教育活動を拾いあげてみよう。

講義から標本貸し出しまで

まず，児童生徒向きの活動としては，次のようなものがある。

① "The World We Live In"（「わたくしたちの住む世界」）

小学校3年生から中学校2年生までを対象とするもので，館のスタッフが展示場などで児童生徒（クラス単位）に特定テーマの講義をおこなう。月曜日から金曜日までの毎日，午前10時15分または10時45分から。

テーマは，たとえば，社会科関係の場合，「アフリカの人々」，「アメリカのインディアン」，「エスキモーの文化」など。変ったところでは，「展示はどのようにして出来あがるか」といったテーマも用意されている。

② "Exploring Man and Nature"（「人間と自然の開拓」）

同じく小学校3年生から中学校2年生までを対象とするもの。館のスタッフが講堂で児童生徒のグループに講義する。カラースライド，映画，録音テープなどが使われる。講義のあと，展示場も見学させる。火曜日から金曜日までの毎日，午前10時30分から。

テーマは，たとえば，「アフリカの諸民族」，「エスキモーとインディアン」など。

③ 自然科学教室

2階に Natural Science Center という一種の理科教室があって，ニューヨークの自然環境の学習に役立つ標本やグラフなどが展示され，常駐の指導員が児童生徒の指

導に当たっている。水曜日は小学校1～2年生を，また火曜日，木曜日，金曜日は小学校3年生から中学校2年生までを対象。いずれも午前中。

なお，このセンターは，午後は一般の入館者に開放される。

（私も，この小さなセンターを見学したが，岩石などの標本が戸棚の引出しなどに整理され，こどもが自由に手に取ることができるようにしてあった。椀形の大きなイヤホンを耳にあてて，鳥の声をはじめ「ニューヨークのさまざまな音」を聞く装置もあった）。

以上はいずれも団体予約制。特に聴講料のようなものは徴収していないが，博物館の入館者はこどもの場合，原則として50セントの入館料を納めることになっている。

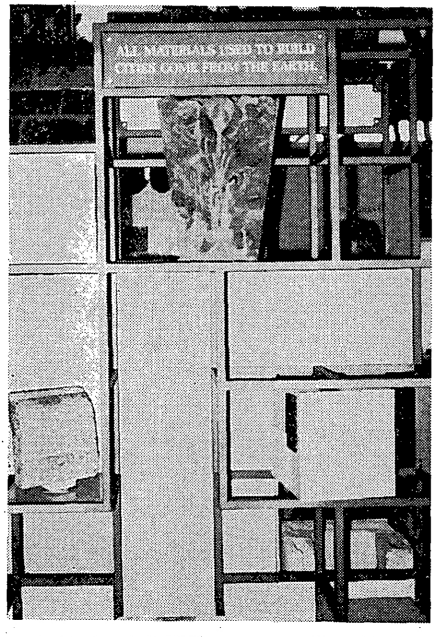


写真6　自然科学センターの標本展示
（「都市の建設に使われる材料はすべて大地から。」と書いてある。）

④　出張講演

博物館の指導員が学校に出張し，16ミリフィルムを使って，大勢の児童生徒に特定テーマで講演をする。毎週火曜日午後。出張先は中学校と高等学校。予約制。

⑤　標本セットの貸出し

学校から申し込みを受けて，一定の標本セットの貸出しを行う。標本は博物館のトラックで運ぶ。貸出し期間は12日以内。

児童生徒用の食堂もある　児童生徒を対象とした教育活動に関連して付け加えておきたいのは，博物館の地階に一般用のカフェテリアとは別に，児童生徒の団体のために特別の食堂が設けられていることである。食堂とはいっても，食事を注文して食べる所ではなく，こどもたちが家から持参した弁当を食べるところである。ただし，ソフトドリンクなどは買えるようになっている。この食堂の利用も予約制である。

こういう特別食堂は，シカゴのフィールド自然史博物館などでも見かけたから，アメリカでは多くの博物館・美術館がこの種の食堂を設けているのであろう。

海外旅行も実施　成人を対象とする活動としては，次のようなものが用意されている。

①　民族芸能

2階の「成人センター」(People Center) で，週末に民族音楽，民族舞踊その他の催物をおこなう。土曜，日曜の午後1時から4時30分まで。

② 講演会

春と秋の2回，毎夕7時頃からさまざまのテーマによる講演会が開かれる。各テーマごとに毎週1回ずつ，5回ないし8回に及ぶ連続講演。講師には，博物館の研究員や教育スタッフが当たるほか，外部から専門家を呼んでくる場合もある。有料（20ドルないし30ドル）。

③ 海外旅行

館のスタッフの引率する海外の団体見学旅行。期間は3週間から1カ月程度。旅行先としては，1976年には西アフリカ，東アフリカ，南アメリカなどが予定されている。

④ 国内旅行

同じく館のスタッフの引率による団体旅行。たとえば，「グランド・キャニオン地質学の旅」，「鳥の愛好者のための週末見学旅行」など。

教師の現職教育にも一役

そのほか，こどもを含めた一般の入館者を対象に，各種の講演会，スライド映写会，映画会などが催されるほか，1年を通じて説明つき館内一周（Guided Tour と称している）のサービスがある。

また，ニューヨーク市内の公立学校の教師や市立カレッジの大学院学生のために，大学院課程の単位を取得できるコースを市立カレッジと提携して設けていることも，特筆に値しよう。ひとつのコースの講義時間は毎週1回（夕方）2時間ずつ，15回で合計30時間。これで3単位が取れる仕組になっている。1975年度第1セメスターのコースに例をとると，人類学関係では「太平洋諸島の諸民族」，「アフリカの美術工芸」などのコース名がリストにあがっている。

4）組　織

館員700人

最後に，この博物館の組織に触れておこう。館内の機構は，大体次ページの図6のとおりである。各部門のところに示した数字は「スタッフ」の数で，このほかに，秘書，事務員そのほかの職員が多数雇われている。ニコルソン館長によれば，館員の数は，大ざっぱにいって常勤600人，非常勤100人とのことである。

なお，10を数える研究部門は，正規の研究員のほかに，Research Associate と称する若手の研究者を100人ばかりかかえている。この若手研究者たちはおおむね，いずれかの機関からポスト・ドクトラル・フェローシップを受けながら，博物館の研究に協力している人たちである（ニコルソン館長は，これらの研究協力者を「常勤」職員のなかに数えているようだ）。

この博物館は，プラネタリウムを付設しているほか，直営の売店もいくつか経営しており，その要員もすべて館員として雇っている。また，展示の設計・施工もその大半を館みずからがこなすようにしているので，いきおい尨大な数の職員をかかえることになるのであろう。

ボランティアを活用

この博物館には，正規の館員のほかに多数のボランティアが働いている。その大半は大学生や主婦である。ボランティアの仕事としては，展示場の案内や展示品の説明の仕事のほか一般事務，図書事務，写真撮影などがあるが，ボランティアの大半は展示場の案内・説明の仕事に従事してい

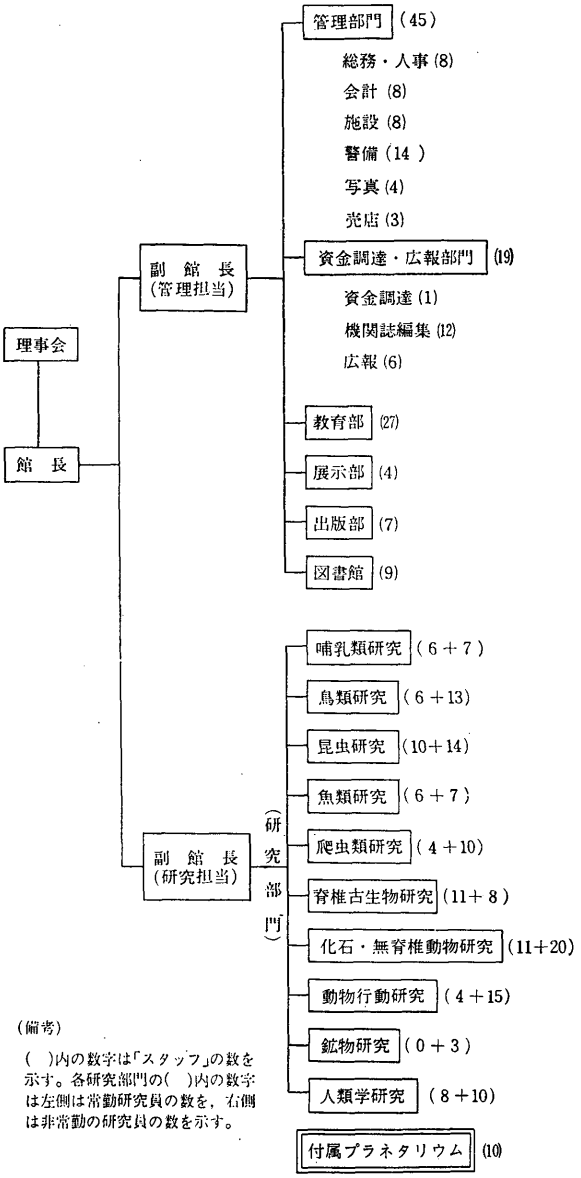


図 6　アメリカ自然史博物館の組織

る。そのような教育的な仕事を分担するボランティアは「ドーセント (Docent)」と呼ばれている。

このドーセントはもちろん無給である。なり手はいくらでもいるというので一体，どういう点に魅力があるのか，館長に尋ねたところ，「それはふたつある。第一は，博物館で働くこと自体に魅力があるということ。つまり，博物館が好きな人たちが集まる。第二は，ボランティ

アとして勤めているあいだに，館の内外に有給の職場を見つけるチャンスが多いということだろう」と館長は答えた。

なお，この「ドーセント」というボランティアは，このニューヨークの博物館だけにいるわけではない。サンフランシスコ，シカゴ，ワシントン，ニューヨークの4都市で私が訪問した博物館，美術館のほとんどはこの「ドーセント」をかかえていた。これは，ボランティア精神を尊重するアメリカの伝統が生んだ，アメリカ的な労働形態と見てよいであろう。

おわりに

以上3か所の自然史博物館は，それぞれの歴史と所在地の土地柄などを反映して，互いに異なる個性をそなえてはいるものの，共通の特徴をいくつか持っていることも明らかである。めぼしいものを拾いあげれば，次のようになろう。

1. **民族学展示の内容**　展示の中心がアメリカ両大陸にあること。
2. **民族学展示の方法**　展示の方法がおおむね保守的であること。
3. **展示品などの説明**　展示品の解説文や案内用パンフレットの説明文が，ていねいで分かりやすいこと。
4. **教育活動の推進**　周辺地域の児童生徒の教育に博物館が積極的な役割をになっていること。
5. **ボランティアの活用**　展示場の案内や展示品の説明などの仕事に，多数のボランティアを活用していること。

これらの点は，この3つの博物館だけでなく，アメリカの多くの自然史博物館にほぼ共通にみられる特徴といえるかも知れない。

それぞれの点について，最後に簡単なコメントを加えておきたい。

第1の点は，アメリカ民族学界の研究蓄積がアメリカの両大陸について最も多いことを反映するもので，特に取り立てていうことはあるまい。

第2の点については，もっとモダンな展示方式が採用されているものと期待していただけに少々予想外であった。しかし，それはそれとして，たとえば，国立自然史博物館の内部資料が，実物展示中心主義の原則を明らかにし，「映像音響の魅力は実物そのものの迫力には及ばない」と宣言しているのは，それなりに示唆に富むと思われたし，また，映像音響機器がかなり導入されているアメリカ自然史博物館の館長が「当館の機械は毎日どれか故障している」とこぼしていた言葉は，「他山の石」として耳に残った。

第3の点は，展示品の解説文や案内資料の説明文を中学校や高等学校の生徒にも分かりやすく読みやすいものにしようとする博物館当局者の努力の結果であり，そのような努力は，範として学んでよいであろう。

第4と第5の点は，アメリカ特有の伝統と社会風土の好ましい産物とみることができる。積極的な教育活動の推進もボランティアの活用も，博物館と地域社会とのつながりを深め，博物館に対する一般の認識を高める役割を果たすものとして，いずれも高く評価したい。